

アイロニー

山月記	p.27「人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。」「古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように」李徴は徐々に虎になり、人間の心を失っていくアイロニー。 p.31「人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。」という哲学に気付くも、彼に残された人生は完全に虎にかわるのみ。悲観的なプロットのアイロニー。 ⇒人生の不条理、 李徴が虎になって初めて自分の弱さに気が付くというアイロニー。 ⇒人間の弱さ、エゴ
舞姫	p.449「何らの特操なき心ぞ、「承はり侍り」と応へたるは。」p.451「我豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたまひしか」p.452「パラノイアといふ病なれば、治癒の見込みなしといふ。」 結末がアイロニー:「自由な大学の風的な引用」などに触れ「官長はもと心のままに用いるべき器械をこそ作らんとしたりけめ」と個人主義に気付いた豊太郎(日本的な考えから離脱)だったが、最終的に相沢に勧められるがまま子供を身ごもったエリスを置いて帰国。 ⇒人間のエゴ、 相沢との美しき？友情がエリスと豊太郎を引き裂くという皮肉。「あゝ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得がたかるべし。」 ⇒人間のエゴ、
砂の女	結末がアイロニー:当初砂の穴からの脱出のみを考えていた男であったが、最終的に溜水装置「希望」の価値を村人に広めたいがために脱出方法があるにも関わらず留まった。 ⇒人間のエゴ、 砂の中の生活という非日常性を象徴するものが日常に変わっていく。砂の穴の中の不条理な生活は元々の生活と変わらなかったというアイロニー。流動を求めて定着してしまう男。 ⇒灰色の日常 p.59「ちゃんとした戸籍をもち、職業につき、税金もおさめていれば、医療保険証も持っている、一人前の人間」p.69「税金も払ってりや、住民登録票だって持っている」 ⇒通用しない形式的なモノにとらわれているさま。滑稽。
沈黙	クライマックスがアイロニー:ロドリゴが待ち続けた神の言葉、沈黙を破った言葉が「踏んでもいいよ」的な言葉だったこと(ロドリゴ目線) ⇒イエズス会におけるキリスト教の信仰が必ずしも日本で応用できないこと、正の普遍性、 結末がアイロニー:パードレが最終的に棄教し日本人の名前と妻を持ち生活していることが(ロドリゴ以外目線、客観的) ⇒人間の滑稽さ、 強い人、例えばガルペ、イチゾウは死んでいくのに対し、キチジローは生きているという皮肉。 ⇒信仰の意味、神の沈黙

比較・対比のヒント

共通点として、結末をアイロニックに終わらせる工夫がされている作品(舞姫・砂の女・沈黙)、そして主題を強調している(舞姫・砂の女)。また、人間の欠陥、エゴなど(山月記)を露にしたり、読者を驚かせたりする。

相違点として、プロットのどの時点においてアイロニーを使用しているか(クライマックスか結末か)や読者の同情を引くもの(山月記・沈黙)と読者の憤りを買うもの(同意できないもの?)(舞姫・砂の女)などの違いが挙げられる。

例として『砂の女』と『沈黙』を比較・対比:どちらもアイロニーを結末に用いており、主題との関連及び人間のエゴを露呈する働きをしているが、『砂の女』におけるアイロニーは読者に疑問や憤りを感じさせるのに対し『沈黙』では読者の同情を買う働きをしている。

イメージ

山月記	月 変身	山「月」記 p.30「時に、残月、光冷ややかに」p.32「月に向って咆えた。」p.35「既に白く光を失った月」月は時間経過と李徴が人間の心を失っていく過程を示す。 googleで「山月記 タイトル」で検索 p.26「知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた」「気が付くと、手先や肘のあたりに毛を生じているらしい」李徴が虎に変身する過程を表す。 ➡主題の強調
舞姫	ベルリンの描写 エリスの描写	p.421「この大道髪のごときウンテル、デン、リンデンに来て両辺なる石だたみの人道を行く組々の士女を見よ」p.422「始めてここに来しものの応接に違なきも宣なり」、「あだなる美観」に値する西洋の美しい風景の描写 p.427「被りて巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて」「青く清らかにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛」美しいエリスを描写 ➡豊太郎の視点から見るもの、彼の心情やムードを引き出す
砂の女	砂 空間描写 集落 穴の中の家 ランプ	モチーフ参照 監視されている p9「高い火の見櫓を中心に」 p163「いつも誰かが、火の見から、双眼鏡でのぞいていますから」 p18「半月形にそそり立ち、城壁のように部落をとりまいている砂丘」 アリジゴクのイメージ p20「幅二十メートル」 p26「砂の崖」「屋根の高さの三倍」「ほとんど垂直」「まるで天然の要害の中に住んでいるよう」p30「一日掃除しないと、一寸もつまってしまいます。」 p195「台所があり、日の燃えている竈(かまど)があり、教科書をつんだ机代わりのりんご箱があり、台所があり、、、」p33「洗い場」 ➡身動きの取れない現代社会の比喩、女と男に焦点 p35「笑いながらランプの芯を、指ではじいた。」 ➡妖艶な描写、暗い中四つん這いになった女に下の方から橙色の火があたる様子
沈黙	陰鬱な自然描写 光と影 殉教	➡その場の重い雰囲気をも引き出す ➡登場人物の権力構図 殉教の様子はだまかに3回。 ①水礫に処されるモキチ・イチゾウの殉教 p.88「潮がみちてきました。二人の姿は動きませぬ」p.89「参ろうや、参ろうや」p.90「もう杭と人間との区別もつかない」p.104「その海の波はモキチとイチゾウの死体を無感情に洗いつづけ、呑みこみ」 ②盲目のジュアンの殉教 p.185「突然誰かが中庭を走った。ずっしりと重く、鈍い音が響いた」「すると黒い血がどこまでもその死体から帯のように流れていった」p.208「あの百日紅に蟬が鳴き、陽の照りつけた地面にひとすじの赤黒い血が流れた中庭」 ③モニカから信者とそれに続くガルペの殉教 p.207「青鈍色の単調な波が相変わらず浜を噛んでいた。雲は太陽を覆いかくして鉛色に低くたれこめていた」p.210「我らの祈りを…聞きたまえ」「(信者たちは)垂直に海に消えていった」「ガルペの頭だけが難破した船の木片のようにしばらく漂っていたが、船のたてた波が間もなく覆ってしまった」 ➡殉教のたびにロドリゴは神の沈黙を問う。ロドリゴが主題である正の普遍性を問う機会になっている。

比較・対比のヒント

共通点として、イメージャリーが主題に影響している点(砂の女・沈黙)やイメージャリーが登場人物(主人公)に影響を与えた場面において登場している点(エリスに会った時の豊太郎や殉教を目の当たりにするロドリゴ)、空間描写・情景描写が読者にsense of placeを与える: 読者を引き込む役割、読者の視覚にアピールする役割、また日常的にあまり起こらない事象を描写することで読者の想像を助長したり補足したりする役割がある。読者の想像に委ねず、統一したイメージを与えていることから、物語において重要な点であることもわかる。

相違点として、イメージリーを用いる際の語彙やトーン・ムードなどがそれぞれ異なる。(山月記:「気が付くと」「知らぬ間に」沈黙:「重く、鈍い」「青鈍色の単調な波」)

例として『舞姫』と『沈黙』を比較・対比:

イメージリーが登場人物(主人公)に影響を与えた場面において、人物目線で登場している点(エリスに会った時の豊太郎や殉教を目の当たりにするロドリゴ)が共通している。しかし『舞姫』ではベルリンやエリスの色彩豊かで美しい語彙やトーンでイメージリーを施しているのに対し、『沈黙』では衝撃的かつ陰鬱な語彙やトーンでイメージリーを用いている。これは各作品の登場人物(豊太郎とロドリゴ)の心情やムードを演出している。

モチーフ(題材) シンボル(象徴) メタファー(隠喩)

山月記	虎・猛獣 猛獣使い 叢 月	p.31「人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。」「おれの場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。」 p.24「一匹の猛虎が叢の中から躍り出た」p.28「叢中の声」p.35「元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった」 ➡主題の強調、空間認識(哀惨 叢 李徴) 李朝の心情を表す。イメージリー参照。
舞姫	手紙 西洋—ベルリン	➡豊太郎の心情の変化を知る? ➡西洋と日本の違い・対立
砂の女	定着と流動 砂 片道切符/往復切符 希望 水 ハンミョウ 手紙	1/8mm 流動と定着を表す。p.17「流動する砂のイメージ」p.202「砂を定着の拒絶だと考えた」vs p.17「年中しがみついていることばかりを強要し続ける、この現実のうっとうしさ」。男の認識の変化→p.242「砂にだってまるで正反対の面もあるんだ!……たとえば、その性質を逆に使って、鋳型をつくる」p.259「砂の毛管現象」、砂の中で生活する定着への理解(定着を拒絶しない) ➡非日常と日常 男の定着への意思表示。自分で水を得られるようになるということは、水によって脅迫された定着ではなく、定着を自分から望むようになるということ。部落の中に存在理由を見出すということ。 砂も水も同じ無機物。しかし全く違う。当初砂に湿気があるという点について執拗に女を追求した男。しかし結末では溜水装置の発見に伴い砂と水の関係性を認めるように。2項対立から調和へ。 p.19「ハンミョウ属は群居をきらい」 「ぶよぶよ」で手に力を加えると血が噴き出す ➡女が子宮外妊娠で出血をする様に似ている。暗示(フォーシャドー)
沈黙	踏み絵 キリスト 神 蟬	p.293-294「哀しそうな眼をしてこちらを向いている。」 沈黙の象徴? ロドリゴの心情を表す。

比較・対比のヒント

共通点として、主題を強調、モチーフを対立させることによってお互いを引き立たせている(流動と定着、西洋と日本など)、

相違点として、『山月記』では叢をモチーフとして読者に空間を認識させる。舞姫でも距離感を感じさせる。『砂の女』における手紙や『沈黙』における神は、暗示の機能も果たしている。

例として『山月記』と『砂の女』を比較・対比

『山月記』と『沈黙』 類似点: 月と蟬のように物語における登場人物の心情と連動して変化していく情景によって、登場人物の心情変化を強調する。結果として、主題が強調される。相違点: 月は視覚的だが、蟬は聴覚的。空に一つ浮かぶ孤

高の存在は、まさに李徴そのもの。また、月は、静かな物語空間を崩さない。一方、蟬の「声」は神の「沈黙」と対照的。ロドリゴの心のなかでの呼びかけ「なぜあなたは黙っているのですか」といった「声」と重なる。主題に合った伝え方がある。沈黙の主題は聴覚的に(声として)伝わってくるイメージで山月記は視覚的に(見た目として)伝わってくるイメージ。